

# タムラサトル

## ワニがまわる理由は、聞かないでほしい

作家名 | タムラサトル  
展覧会名 | ワニがまわる理由は、聞かないでほしい  
会期 | 2022年8月27日（土）－9月24日（土）  
会場 | MAKI Gallery / 表参道, 東京



このたびMAKI GalleryとTEZUKAYAMA GALLERYでは、栃木県を拠点に活動するタムラサトルの個展「ワニがまわる理由は、聞かないでほしい」を共同開催いたします。本展は、今年6月に国立新美術館（東京・六本木）で好評を博した個展に続き、タムラが30年近くにわたり制作を続けてきた代表作、「まわるワニ」シリーズに焦点を当てます。東京・表参道と大阪・南堀江の2会場で合計1,000匹以上のワニが回転し、彩りと動きの爆発が、観る者を非現実的なダイナミズムで包み込みます。

まわるワニが初めて構想されたのは、タムラがまだ筑波大学の学生だった1994年秋でした。当時機械仕掛けの作品が全くの未経験だった彼は、「電気を使った芸術装置」という教授からの課題に頭を悩ませていました。「明日の朝、最初に思い付いたものを作ろう」。そう決心したタムラが翌朝ふと思いついたのが「まわるワニ」だったのです。彼は有言実行とばかりに、4.5メートルの緑色のワニを手作りし、回転する台座に設置しました。そのばかばかしい光景に魅了され、タムラは卒業後も同じように不条理なコンセプトを追求するようになります。以降、電気と機械仕掛けはタムラの芸術実践において不可欠な存在となり、まわるワニは作家のキャリアとともに進化し続けました。

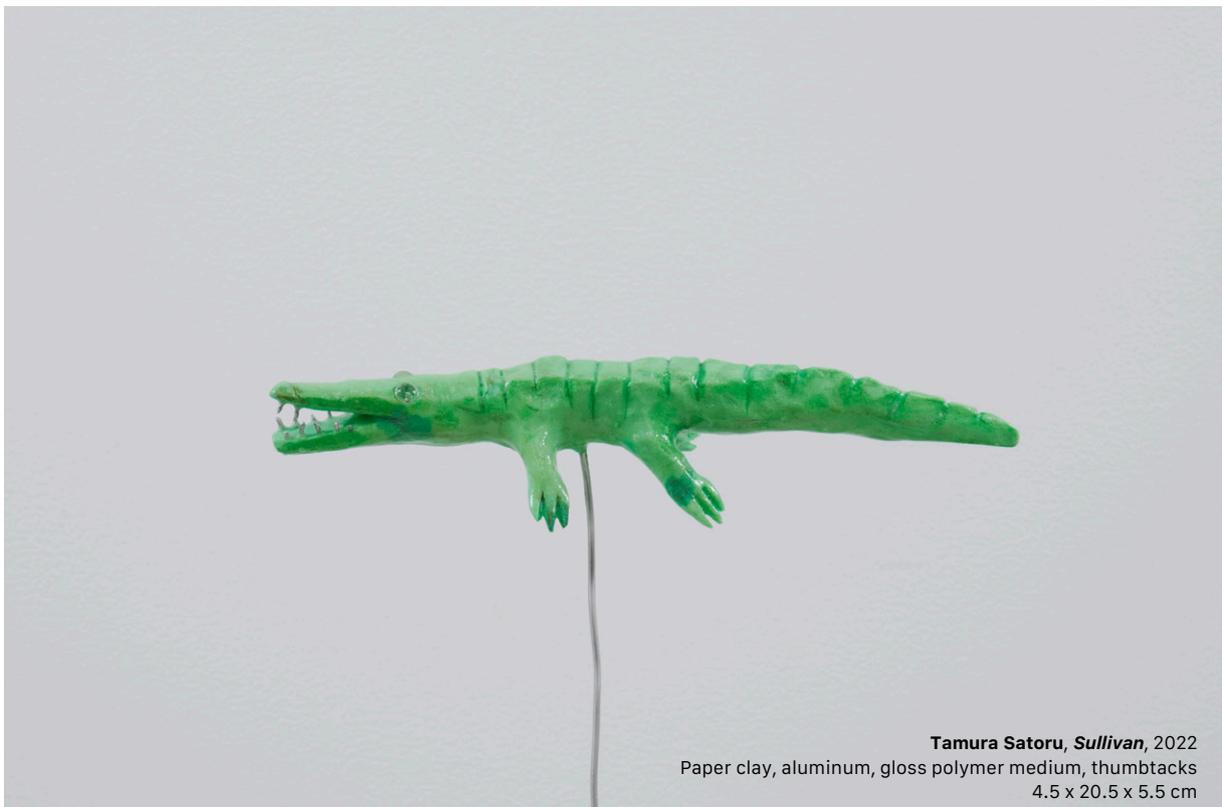
2022年、タムラは1,000匹のまわるワニを作って国立新美術館の巨大な展示スペースを埋め尽くすという異例な大仕事に挑みました。作業を効率化する工夫を重ねながら、自身の手で粘土を扱い、タムラはワニを一

一つ一つ丁寧に形成していきました。また、それぞれユニークな名前を付け、回転速度にも微妙な変化を付けることにより、ワニたちの個性をより際立たせたのです。そのためか、ワニたちは電動の機械装置にも関わらず、独特な温かみと人格を持っているように感じられます。

ワニは、日本では野性に生息せず飼育下の個体しか存在しないため、一般的には危険でエキゾチックな動物という印象を持たれています。その異質さをさらに誇張すべく、タムラはワニたちを青やオレンジ、白など様々に彩り、20センチから12メートルまでの幅広いスケール感で制作しています。同時に、恐ろしい生き物が無害でキッチュなキャラクターに変身するという、純粹に面白い現象を作り上げています。不思議なことに、タムラのワニは現実から離れれば離れるほど、愛らしく親しみやすい存在になっていくのです。

タムラのキネティックな彫刻は電気や工業素材を利用しながらも、全く非生産的であることが特徴です。彼の芸術実践に通底するアイロニックな無用さには、生産性や効率に固執する現代社会へのさりげない皮肉が含まれています。実際、タムラの作品は明確な芸術的目的すら提示しておらず、芸術の役割や意味に対する鑑賞者の固定観念を覆します。本展のタイトル通り、タムラは作品の意図をはっきりと定義することを拒んでおり、鑑賞者には直感的に作品に触れ、自身の素直なりアクションに意識を向けることを促しています。

是非この機会に、自然と機械がぶつかり合い、ナンセンスでありながら魅力的である、タムラの不思議な世界をご高覧ください。



Tamura Satoru, *Sullivan*, 2022  
Paper clay, aluminum, gloss polymer medium, thumbtacks  
4.5 x 20.5 x 5.5 cm



## タムラサトル

タムラサトルは1972年栃木県生まれ、1995年筑波大学を卒業した後、作家活動を開始しました。タムラの作品には、電気という現代文明に欠かせないもの、いわゆる社会インフラ（インフラストラクチャー）が使われています。ときには動力となってワニを回し、ときには計測器となって美を数値化し、そしてあるときはプラスとマイナスの電極をギリギリに接触させてランプを灯します。「だからなんだ？」と思わずつぶやきたくなるアイロニーに満ちたこれらタムラの作品は、大がかりな‘装置’であるゆえに遊園地を思わせます。それは作家がいみじくも語る「素材・形態がもつであろう意味・設定・目的からも、自由でありたい」を具現化しており、作品を通してタムラが訴えるところなのです。

電気があまりにも生活に、産業に深く入り込み、私たちはそれがもはや所与のものと感じています。ひとたび停電ともなれば、いかに電気に依存した生活を送っていたかがわかる今日。これほど社会に欠かせない有用な電気を、何も生み出さない、なんの役にも立たない無用なものとして、彼はシニカルなユーモアを交えて作品にします。タムラの作品は、まさに見ることを禁じたファインアートそのものなのです。そして有用性のみが優先する社会にも警告を発するのです。

主な個展に「ワニがまわる タムラサトル」国立新美術館（東京、2022年）、「TOKYO マシン」銀座 蔦屋書店 GINZA ATRIUM（東京、2021年）、「タムラサトル展 Wall to Wall (Domain of Art 22 プラザノース開館10周年記念展)」プラザノース ノースギャラリー（埼玉、2019年）、「Point of Contact #6」LAGE EGAL RAUM FÜR AKTUELLE KUNST（ベルリン、2015年）、「タムラサトル《真夏の遊園地》」栃木県立美術館（栃木、2014年）がある他、「世界の呼吸法－アートの呼吸 呼吸のアート（川村記念美術館開館15周年記念）」DIC 川村記念美術館（千葉、2005年）/ 佐倉市立美術館（千葉、2005年）、「I am a Curator」Chisenhale Gallery（ロンドン、2003年）、「First Steps: Emerging Artists from Japan」P.S.1 Contemporary Art Center（ニューヨーク、2003年）、「NEO-TOKYO: Japanese Art Now」シドニー現代美術館（シドニー、2001年）など、国内外のさまざまなグループ展にも参加しています。さらに、2017年 International Light Art Award 2017 First Prize 受賞、2009年 第12回岡本太郎現代芸術賞展（TARO賞）特別賞、2002年 フィリップ モリス K.K. アートアワード 2002「ザ・ファースト・ムーヴ」特別賞、1999年 KIRIN CONTEMPORARY AWARD 1999 奨励賞など多数の受賞歴があります。



MAKI Gallery / 表参道, 東京

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-11-11  
Tel: 03-6434-7705  
Fax: 03-6434-7706  
E-mail: info@makigallery.com  
営業時間: 11:30 - 19:00  
定休日: 日曜・月曜

\*本企画に関するお問い合わせは下記までお願い致します。